

# ナントの聖ヴェロニカ兄弟会とトゥールの聖顔の大信心会 受難のキリストを見つめる霊性の地域的展開

大須賀 沙織

はじめに

十字架の道行きで、キリストをあわれみ、ヴェールを差し出したヴェロニカと、彼女の手に残された聖顔布は、受難劇や宗教美術の題材となっただけでなく、独自のコンフレリ（兄弟会、信心会）も生み出してきた。14世紀に、ブルターニュ公国の中心都市ナントで「聖ヴェロニカ兄弟会」が創設され、19世紀には、ナントの兄弟会の霊性を受け継ぎつつ、ロワール地方の中心都市トゥールで「聖顔の信心会」が創設され、大信心会へと発展した。本論では、ナントの兄弟会とトゥールの信心会がどのようなものであったか、また、それぞれの信心会の手引書がどのようなものであったか、以下の流れで考察する。

1. 受難の聖遺物、ローマのヴェロニカ、パリの兄弟会
2. ナントの聖ヴェロニカ兄弟会—15世紀の創設から19世紀まで
3. ナントの聖ヴェロニカ兄弟会の手引書（17世紀末）—レンヌの霊性ととともに
4. トゥールの聖顔の信心会と手引書（19世紀後半）

兄弟会や信心会を表す« confrérie »（コンフレリ）は、「（兄弟のように）緊密な絆で結ばれた人々の集団」<sup>1</sup>を意味する。より具体的には、「1. 信心、慈善の絆で結ばれた一般信徒の団体」、「2. 古くは、職業団体、同業者団体」<sup>2</sup>とされている。

<sup>1</sup> *Dictionnaire du Moyen Français*, version 2020. <http://www.atilf.fr/dmf/definition/confrerie> 古い表記では、« confrairie », « confrarie », « frérie »なども見られる。

<sup>2</sup> *Dictionnaire de l'Académie française*, 9<sup>e</sup> édition. <https://www.dictionnaire-academie.fr/>

日本では兄弟会、兄弟団、信心会などと訳され、あるいはそのままコンフレリとされることもあり、訳語の選択はむずかしい。コンフレリは、特定の信心に根差し、祈り、慈善、相互扶助、葬儀、祝祭などをともにする兄弟会、あるいは同業者団体であったと言えるが、中世においては、慈善、相互扶助、祝祭が主な活動であったのに対し、16世紀の宗教改革、対抗宗教改革後は、信心、信仰そのものに人々の思いが向けられ、より内面化した活動に変化していく<sup>3</sup>。本論では、ナントのコンフレリは「聖ヴェロニカ兄弟会」、トゥールのコンフレリ（アルシコンフレリ）は「聖顔の（大）信心会」と訳し分けた。ナントの会は15世紀に創設され、王侯貴族、高位聖職者、有力者の男性からなる慈善団体の側面が強く、トゥールの会は19世紀に創設され、司祭、一般信徒、修道者の男女からなり、信仰と祈りをともにする祈祷共同体であったためである。

## 1. 受難の聖遺物、ローマのヴェロニカ、パリの兄弟会

受難のイエスの聖遺物として、十字架の木、茨の冠、手足をとめた釘のほか、複数の布が伝えられてきた。イエスの遺体を包んだ埋葬布（シンドン）は、エルサレムからエデッサ、コンスタンティノーブルを経て、1204年、第四回十字軍のあとフランスに渡ったと見られ、1578年以降、トリノに移されて、「トリノの聖骸布」

---

article/A9C3555

<sup>3</sup> 橋口倫介「中世フランスにおけるコンフレリー：その宗教思想史的考察」、『ソフィア：西洋文化ならびに東西文化交流の研究』7巻4号、1958、p. 57-72。江川温「中世末期のコンフレリーと都市民」、中村賢二郎編『都市の社会史』、ミネルヴァ書房、1983、p. 86-112；「兄弟団」、柴田三千雄ほか編『世界歴史大系フランス史1—先史～15世紀』、山川出版社、1995、p. 401-403。河原温「フラテルニタス論」、『岩波講座世界歴史8 ヨーロッパの成長』、岩波書店、1998、p. 175-200；「兄弟団（コンフレリ）と相互扶助」、佐藤彰一ほか編『西洋中世史研究入門』、名古屋大学出版会、2005（増補改訂版）、p. 87-92；「信心・慈愛・社会的絆—中・近世ヨーロッパにおける兄弟団（コンフラタニティ）の機能と役割をめぐって」、早稲田大学『地中海研究所紀要』第4号、2006、p. 67-77。河原温、池上俊一編『ヨーロッパ中近世の兄弟会』、東京大学出版会、2014。横原茂「旧体制期フランスにおける信仰と慈善—コンフレリーに関するノート」、島根大学『福祉文化』4巻、2005、p. 28, 33。野口洋二「民衆の宗教生活と信仰の内面化」、『世界歴史大系フランス史1』p. 471-473。

(Shroud of Turin / Linceul [Suaire] de Turin) と呼ばれている<sup>4</sup>。スペイン北部のオヴィエドにも、「オヴィエドのスダリウム（手拭い、汗拭き、布切れ）」(Sudarium of Oviedo / Suaire d'Oviedo) と呼ばれる亜麻布が保管されており、聖骸布とともに墓に残されていた布ではないかとされる<sup>5</sup>。イアン・ウィルソンによれば、ローマのサン・ピエトロ大聖堂には、1011年頃、キリストの顔の模写がもたらされ、「スダリウム」のための祭壇が聖別されている。この肖像は「ヴェロニカ」（真のイコン）と呼ばれるようになり、ローマの新たな聖遺物として崇敬され、多くの巡礼を集めるようになった<sup>6</sup>。1143年に教皇が「ヴェロニカと呼ばれているキリストのスダリウム」に撒香したという記録があり、1191年にはフランス王フィリップ2世尊厳王 (Philippe II Auguste, 1165-1223) がローマを訪れ、教皇が「ヴェロニカ、すなわちイエス・キリストが顔を印した布」を見せている。その布の「刻印は非常に鮮明なので、イエス・キリストの顔を今でもそこに見ることができる」と記されている。1207年にはヴェロニカの祈祷行列が行われている<sup>7</sup>。

ヴェロニカ伝説は、福音書（マルコ5章25-34節、マタイ9章20-22節、ルカ8章43-48節）と新約聖書外典『ニコデモ福音書』（4世紀頃成立）の、イエスの「衣のふさ（frange）」に触れて長血の病を癒された女をもとに物語が生成され、ラテン語散文の物語『ピラトの死』（6-7世紀）や『救い主の復讐』（8世紀頃）で、イエスの肖像によるローマ皇帝の病氣治癒譚が描かれ、ローマではおそろくなじみの

<sup>4</sup> Ian Wilson 『トリノの聖骸布—最後の奇蹟』 木原武一訳、文藝春秋、1985 (*The Shroud of Turin*, New York, 1978 ; revised ed., 1979 ; *The Turin Shroud*, London, 1978 ; revised ed., Penguin Books, 1979) ; *The Shroud: Fresh Light on the 2000-Year-Old Mystery*, London, 2010. Gaetano Compri 『聖骸布』、サン・パウロ、1998 ; 『キリストと聖骸布』、イエス・プレス、2010 ; 『これこそ聖骸布』、ドン・ボスコ社、2015.

<sup>5</sup> Gaetano Compri 『聖骸布』 p. 209-211 ; 『キリストと聖骸布』 p. 226-231 ; 『これこそ聖骸布』 p. 72-73.

<sup>6</sup> ペトラルカ (Petrarca, 1304-1374) の時代、ヴェロニカの聖顔布は、ローマの巡礼者をもっとも引きつける聖遺物となっていたという (河原温「中世ローマ巡礼」、歴史学研究会編『巡礼と民衆信仰』、青木書店、1999、p. 109, 113, 115)。

<sup>7</sup> Ian Wilson, *The Turin Shroud*, London, 1979, p. 122, 292 (『トリノの聖骸布』 p. 148-149, 337) ; *Holy Faces, Secret Places : An Amazing Quest for the Face of Jesus*, New York, Doubleday, 1991, p. 38-50. Gaetano Compri 『聖骸布』 p. 56-59 ; 『キリストと聖骸布』 p. 189-191.

伝説であった。ローマにイエスの肖像がもたらされたことも弾みとなって、受難劇と図像においてイメージが具体化され、イエスの受難を黙想する信心業「十字架の道行き」第6留にも組みこまれ、人々の信仰と想像世界に浸透していった<sup>8</sup>。群衆をかきわけ、愛と信仰と勇気を示すヴェロニカの姿は、受難のキリストを見つめる人々の模範となり、また、布を象徴的持ち物とすることから、布商人の守護聖女ともなり、ヴェロニカの同業者団体を生み出すことにもなった。

1357年頃、トロワ（Troyes）近郊の村リレ（Lirey）で聖骸布が公開され、多くの巡礼が訪れているが、それと連動するように、パリの受難劇にヴェロニカのエピソードが挿入され、ヴェロニカ兄弟会が創設される。「受難兄弟会」（Confrérie de la Passion）は、ナントでは1370年頃すでに存在しており、パリでは1380年に創設されている<sup>9</sup>。受難兄弟会と連動するように、パリでヴェロニカ兄弟会が誕生する。1382年にシャルル6世が、パリの布商人たちに「聖ヴェロニカ兄弟会」（Confrérie de Sainte Venice [Véronique]）創設の許可を与え、会の拠点はパリのサン・トゥスタシュ教区教会に置かれていた<sup>10</sup>。

<sup>8</sup> 拙論「トリノの聖骸布とヴェロニカの聖顔布についての覚書—福音書から受難劇まで」、『人文学報』518号、2022、p. 27-56。

<sup>9</sup> Émile Roy, *Le mystère de la Passion en France du XIV<sup>e</sup> au XVI<sup>e</sup> siècle*, Hachette BnF, 2016 [1<sup>re</sup> éd. 1903] p. 11\*-12\*. *La Passion du Palatinus : mystère du XIV<sup>e</sup> siècle*, éd. par Grace Frank [1922] éd. bilingue, traduit par Jacques Ribard, Honoré Champion, 1992, p. 75. « Confrérie de la Passion »は、「受難劇団」や「受難劇組合」などと訳される。「受難劇組合」（永野藤夫「中世宗教劇名称考」、『横浜国立大学人文紀要 第二類 語学・文学』1953、p. 68）；「〈キリスト受難劇団〉（1371年、ナント。1380年、パリ）」（V.-L. Saulnier『中世フランス文学』神沢栄三、高田勇訳、白水社、文庫クセジュ、1990、p. 124）；「1371年ナントを皮切りに各地に受難劇上演組合が生れた」（岩瀬孝ほか『フランス演劇史概説』、早稲田大学出版局、1999、p. 9）。

<sup>10</sup> Jean-Augustin Robilliard, « Face (Dévotion à la sainte Face) », *Dictionnaire de spiritualité*, Beauchesne, 1964, t. 5, col. 30. Gustave Fagniez, *Études sur l'industrie et la classe industrielle à Paris au XIII<sup>e</sup> et au XIV<sup>e</sup> siècles*, Paris, Vieweg, 1877, Appendice, p. 286-287. Balthasar, l'abbé. « L'Église Saint-Eustache de Paris », *Revue Archéologique*, 1854, p. 711. Émile Roy, *Le mystère de la Passion en France du XIV<sup>e</sup> au XVI<sup>e</sup> siècle*, p. 89\*. 民衆に愛された狂王シャルル6世については、Jules Michelet『フランス史 中世（下）』、『シャルル6世』立川孝一訳、藤原書店、2010；『フランス史 中世IV』、『シャルル6世の狂気』桐村泰次訳、論創社、2017。

## 2. ナントの聖ヴェロニカ信心会—15世紀の創設から19世紀まで<sup>11</sup>

1382年にパリで聖ヴェロニカ兄弟会が創設されたのにつづき、1413年にはナントでブルターニュ公ジャン5世 (Jean V de Bretagne, 1389-1442) が、「聖ヴェロニカ兄弟会」(Confrairie de la Sacrée-Véronique) を創設する<sup>12</sup>。パリでは、布商人の同業者団体であったのに対し、ナントでは、ブルターニュ公の聖顔への崇敬に発する団体であった。ジャン5世の即位 (1399) 以前にはブルターニュ継承戦争 (Guerre de Succession de Bretagne,



図1  
ナント、レンヌ、トゥール

1341-1365) があり、在位中は百年戦争 (Guerre de Cent Ans, 1339-1453) の渦中にあった。穏やかな性格で、賢明公 (Jean le Sage) とのあだ名をもつジャン5世は、英仏いずれとも戦いを避ける方策をとり、百年戦争のさなかにあって、ブルターニュ公国に戦火が及ぶのを防いだ<sup>13</sup>。1418年、彼は民衆の心を神に向けさせるため、ドミニコ会の名説教師で、教会大分裂期 (1378-1417) にアヴィニョンに仕えたヴァンサン・フェリエ (Vincent Ferrier, 1350-1419) をブルターニュに呼び寄せた。1430年にはレンヌで、ジャン5世の臨席のもと、受難劇が上演されている<sup>14</sup>。

<sup>11</sup> P. Giquello, prêtre de la Sainte-Face à Tours, « La Confrérie de la Véronique de Nantes : notice historique » [以下、Giquello], in Antonin Thomas, *La Dévotion à la Sainte-Véronique, ou la Réparation des ignominies et des outrages faits à la Face sacrée de Notre Seigneur Jésus-Christ*, Tours, 1889, p. XXI-XLIII, note 1. トゥールの司祭ジケロによるナントのヴェロニカ兄弟会略史。ナントの一信徒がナントの複数の図書館で収集した各種文献を提供してくれたことへの謝辞がある。

<sup>12</sup> Jean-Augustin Robilliard, « Face (Dévotion à la sainte Face) », *Dictionnaire de spiritualité*, t. 5, col. 30.

<sup>13</sup> Joël Cornette, *Histoire de la Bretagne et des Bretons*, 2 vol., Éd. du Seuil, 2005, t. 1, p. 310-312, 666. ジャン5世に関しては、弟リッシュモン大元帥との関連で若干の記述がある (Jean-Paul Etcheverry 『百年戦争とリッシュモン大元帥』大谷暢順訳、河出書房新社、1991)。

<sup>14</sup> Joël Cornette, *Histoire de la Bretagne et des Bretons*, t. 1, p. 666.

また、ミサのための寄進や、教会建築支援などを熱心に行い、土地の守護聖人イヴ（Yves Hélor de Kermartin, 1253-1303）に対しては、生涯をとおして特別な信心をもち、ブルターニュの保護を祈っていたという<sup>15</sup>。聖ヴェロニカ兄弟会創設のきっかけは、ジャン5世のローマ旅行にあったとされる。

ジャン5世はローマ旅行から、サン・ピエトロ大聖堂に保管されている聖なるヴェールの複製をもち帰った。大公のきわめて敬虔な信仰心から、救い主のご像に、特別な敬意を捧げようという意図をもった<sup>16</sup>。

ローマ旅行の貴重な記念であり、ローマとブルターニュ公国を外交的に結ぶ絆にも見える<sup>17</sup>「聖なるヴェールの複製」（une copie du saint Voile）が、具体的にどのような図像であったか、論者はまだ確認できていない。この記録から読みとれるのは、ジャン5世の時代はまだローマにヴェロニカがあり（1527年のローマ劫掠により紛失する<sup>18</sup>）、ヴェロニカの複製が作られていたらしいということ、そしてローマのヴェロニカがジャン5世の心に触れ、兄弟会創設にいたったことである。この貴重な肖像はナントのドミニコ会に託されることとなる。

1413年、いと静謐なるブルターニュ公ジャン5世は、ナントのドミニコ会修

<sup>15</sup> ナント生まれの司祭、歴史家ニコラ・トラヴェール『ナント史』による。ブルターニュ北部トレギエ（Tréguier）司教区の城館に生まれ、パリ、オルレアン、レンヌで哲学、法学、神学を修めたあと、司祭に叙階された。貧者や寡婦や孤児の弁護など、愛徳の業をブルターニュ各地で行い、複数の施療院を創設した。1303年5月19日に亡くなるとまもなく、ブルターニュ公ジャン3世が司教たちとともにローマに列聖申請し、1347年5月19日に列聖された。生前から、イヴのとりなしにより数々の奇跡が起こったという。Nicolas Travers (1686-1750), *Histoire civile, politique et religieuse de la ville et du comté de Nantes* [以下、*Histoire de Nantes*], Nantes, Forest, 1836-1841, 3 vol., t. 1, p. 576-578.

<sup>16</sup> Giquello, p. XXIV.

<sup>17</sup> Pocquet du Haut-Jussé, B. A., « Les ducs de Bretagne et le Saint-Siège », *Annales de Bretagne*, t. 38, n° 4, 1928, p. 675-741.

<sup>18</sup> Ian Wilson『トリノの聖骸布』p. 144-145. Gaetano Compri『キリストと聖骸布』p. 191. ローマ劫掠については、André Chastel『ローマ劫掠—1527年、聖都の悲劇』越川倫明ほか訳、筑摩書房、2006。

道院にわれらの主の聖遺物収納所をご自身の負担で造らせ、高貴にして、古くからつづく、敬虔なヴェロニカ兄弟会を創設した。ドミニコ会修道士たちは（本信心会の構成員であるブルターニュ公、高位聖職者、貴族、領主、富裕層ら、多くの名士たちの求めを受け）、ヴェロニカを受け入れ、彼らの教会入口の切妻壁の下にあるシエナの聖カタリナ礼拝堂（現在はヴェロニカ礼拝堂と呼ばれている）で祭務を行うことを承諾した<sup>19</sup>。

ヴェロニカ兄弟会はその後、各時代の記録（1413、1503、1505、1586、1633、1691、1710、1724、1777年）に痕跡が残されており、18世紀末まで存続していた<sup>20</sup>。ヴェロニカ兄弟会は男性のみで構成されていたが、公妃アンヌ・ド・ブルターニュ（Anne de Bretagne, 1477-1514. ナントに生まれ、プロワで死去。ブルターニュ公妃1488-1514／フランス王妃1491-1514）が入会を認められており、公妃の崩御の際には、市を挙げて葬儀が行われ、兄弟会員も参列していた。

アンヌ・ド・ブルターニュはナントに葬られることを望んでいたが、王の意向で王家の墓所サン・ドゥニ大聖堂に埋葬された。しかし、アンヌの遺志により、心臓がナントに運ばれ、父ブルターニュ公フランソワ2世の眠るカルメル会修道院に納められることとなる。葬儀の費用はナント市が負担したが、「ヴェロニカ兄弟会員（Frères de la Véronique）が80リーヴルのろうそくを奉納した。なぜなら王妃は、彼らの兄弟会の姉妹であったからである」<sup>21</sup>。その後、1532年<sup>22</sup>と1541年には、貧者の

<sup>19</sup> Giquello, p. XXVI-XXVII. 典拠は Albert le Grand de Morlaix (dominicain, ca 1599-ca 1642), *Catalogue chronologique et historique des évêques de Nantes*, p. 99. ドミニコ会のこの教会はジャコバン教会と呼ばれていたが、1410年に火災に遭い、再建されたところだった。1413年10月19日に献堂式が行われた（Giquello, p. XXVII, note 1）。

<sup>20</sup> Giquello, p. XXIX.

<sup>21</sup> Giquello, p. XXX. Nicolas Travers, *Histoire de Nantes*, t. 2, p. 271. 小坂井理加「中世後期ブルターニュ司教座都市における祝祭とコンフレリー」、『比較都市史研究』33巻1号、2014、p. 6-7. アンヌの埋葬については、田辺保『ブルターニュへの旅』（朝日選書、1992、p. 52-54）にも記述がある。

<sup>22</sup> 1532年はフランソワ1世（1494-1547）によってブルターニュがフランス王国に併合された年である（『世界歴史大系フランス史2』年表p. 46）。フランソワ1世は、1514年にアンヌ・ド・ブルターニュの娘クロードと結婚したことにより、ブルターニュ公の地位も獲得していた。



救済と、伝染病患者の隔離施設建設のため、資金を提供している。

1532年、穀物不足により、多くの物乞いがナントに押し寄せた。市はエルド施療院、トゥーサン施療院 […] で彼らの救済にあたった。市は貧者の救済のため資金を借り入れた。ヴェロニカ兄弟会 (la confrérie de la Véronique) は、公共の必要に応じ、諸聖人の施し所とバドヴァの聖アントニオの施し所に各50リーヴル、計100リーヴル提供した。貧者はほかの施療院よりもこれらの施療院にあふれていた。[…]

1541年4月1日、ナント市は、伝染病患者を隔離治療するため、現在は聖カトリヌと呼ばれている聖イノサン墓地の近くに施設を建てることを決めた。[…] ヴェロニカ兄弟会 (la frérie de la Véronique) は75リーヴル、聖ジャン・ド・ロピタル兄弟会は35リーヴル、受難兄弟会は25リーヴル、聖カトリヌ兄弟会は10リーヴル提供した<sup>23</sup>。

ナントには当時、20の兄弟会 (confrérie) が存在したが<sup>24</sup>、ヴェロニカ兄弟会は、ブルターニュの領主や名士たちによって構成されていたため、ほかの団体よりも財力があり、貧者と病人の救済のため多くの施しを寄せ、市の公共事業の重要な財源となっていた。16世紀から17世紀にかけて、疫病や飢饉がたびたびナントの町にも襲いかかったが、兄弟会の拠点であるドミニコ会の礼拝堂は、修道士と信心会員の手によって管理維持され、ドミニコ会修道士アントナン・トマによれば、17世紀末にも人々が熱心に通い、壮麗に飾られていた。

ほかの兄弟会においては、当初の熱意はせいぜい半世紀しかもたないのに、この兄弟会は300年前から、特異な輝きをもって花開いているのです。それはあなたがたが熱心に通い、祭壇と礼拝堂をたくさん花瓶と、貴重な装飾と、敬

<sup>23</sup> Giquello, p. XXX-XXXI. Nicolas Travers, *Histoire de Nantes*, t. 2, p. 294-295, 313-314.

<sup>24</sup> Ange Guépin, *Histoire de Nantes*, 2<sup>e</sup> éd., Nantes, Mellinet, 1839, p. 196. 1545年の飢饉の際、施療院に施しをしたナントの信心会16団体の名称がNicolas Travers, *Histoire de Nantes*, t. 2, p. 319に列挙されている。ヴェロニカ、受難、ノートルダム、聖オノレ、聖エロワ、聖アンナなど。



虔な絵画で豊かに飾り、壮麗さを保っているからです。その結果、聖ヴェロニカの礼拝堂と名高き兄弟会は、都市ナントの信仰心を強力に引き寄せ、信者たちはあなたがたに倣って、定期的に通い、信心業を行い、救い主の愛すべき御顔をあがめているのです<sup>25</sup>。

しかし、アントナン・トマの生きた17世紀末が、ナントにおけるヴェロニカ兄弟会の最後の輝きとなり、18世紀には衰退する。それまで会員の大部分は貴族階級と上層ブルジョワジーであったが、まさにこれら上層の人々が、当時流行であった啓蒙思想の影響を受け、兄弟会を去って行ったのである。18世紀前半には、次のような状況だった。

ヴェロニカ兄弟会はすっかり落ちぶれた。かつてこの兄弟会を構成していたのは、ブルターニュの大領主たち、ブルターニュ公と公妃であったが、今では職人団体にすぎない<sup>26</sup>。

「落ちぶれた」と言われているが、兄弟会の担い手が民衆に移り変わったことが見てとれる。1780年の時点でも、聖体の祝日（三位一体の主日のあとの木曜日。多くは6月のいずれかの木曜日）の行列に、ヴェロニカ兄弟会が連なっている。聖体の祝日はナントでも盛大に祝われ、同業者団体（métiers）、修道会（congrégations）、兄弟会（confrairies）、小教区団体（paroisses）が大ろうそくを掲げて行列した。行列の順番も決まっており、もっとも古い団体が行列の最後を飾る習わしだった。ヴェロニカ兄弟会は最後から2番目、最後列は1364年にさかのぼる受難兄弟会であった<sup>27</sup>。

<sup>25</sup> Antonin Thomas, « Épître à Messieurs de la très dévote Confrairie de la Sacrée-Véronique établie à Nantes », *La Dévotion à la sainte Véronique*, p. 8-9.

<sup>26</sup> Nicolas Travers, *Histoire de Nantes*, t. 1, p. 508. Giquello, p. XXXIV.

<sup>27</sup> Giquello, p. XXXV-XXXVI（典拠は「*Règlement pour la procession de la Fête-Dieu* », extrait du *Cérémonial de l'Église de Nantes*, 1780）。ナントの受難兄弟会創設は、エミール・ロワによれば1371年であるが（Émile Roy, *Le mystère de la Passion en France du XIV<sup>e</sup> au XVI<sup>e</sup> siècle*, p. 11<sup>\*</sup>）、ジケロは1364年としている。

1789年5月にヴェルサイユで全国三部会が開かれ、7月のバスティーユ襲撃、8月の人権宣言採択ののち、11月に教会財産の没収と国有化が決議され、1790年7月には聖職者市民基本法が成立する<sup>28</sup>。ナントの教会、修道院、兄弟会にも革命の波は襲いかかり、1789年11月13日、全国三部会の決定に従い、ドミニコ会修道院はナント市に年収報告書を提出している。それによれば、この時点でヴェロニカ兄弟会の礼拝堂は、創設のときと同様、入り口の下に保たれていた。

入口の右の柱の下に、木の格子で閉じられた礼拝堂があり、奥に小さな聖具室がある。この礼拝堂は受難兄弟会、通称ヴェロニカ兄弟会<sup>29</sup>の礼拝のために与えられたものである。この兄弟会はここで、ブルターニュ公ジャン5世によって1413年に設立され、ジャン5世自ら、妻の公妃、高位聖職者、領主、宮廷付き貴族、有力ブルジョワがたとともに最初に加わったのである<sup>30</sup>。

この報告書に基づき、1791年、ドミニコ会修道院の動産は358リーヴルですべて売却された。聖杯や十字架などはこれより前に没収され、造幣局に送られていた。1791年は、あらゆる種類の同業組合（corporations）の結成を禁じるル・シャプリエ法が成立し、1792年のデクレ（政令）で「在俗修道会、兄弟会の例外なき廃止」が加えられた<sup>31</sup>。こうしてヴェロニカ兄弟会は、ほかの兄弟会とともに廃止されたのである。しかし、ナントに根付いていた信心はひそやかに生き延び、19世紀末に再生する。1886年、ナントのカテドラルを新たな拠点として聖顔の信心会（Confrérie de la Sainte-Face）が創設され、2年のうちに4000人を超える会員を擁するようになる<sup>32</sup>。

<sup>28</sup> 『世界歴史大系フランス史2』年表p. 64.

<sup>29</sup> この報告書では、受難兄弟会とヴェロニカ兄弟会が同一視されている。

<sup>30</sup> Giquello, p. XXXVII-XXXVIII. アンヌ・ド・ブルターニュ以前に、ジャン5世の妻ジャンヌ・ド・フランス（Jeanne de France, 1391-1433）も会員だったらしい。

<sup>31</sup> 『世界歴史大系フランス史2』p. 357, 440, 年表p. 65. 高村学人「フランス革命期における反結社法の社会像—ル・シャプリエによる諸立法を中心に」、『早稲田法学会誌』第48号、1998、p. 147, 159. 岡村等「フランス革命における社団解体の理念」、『早稲田法学会誌』第66巻2号、2016、p. 141-164.

<sup>32</sup> Giquello, p. XXXIX-XLIII.

### 3. ナントの聖ヴェロニカ兄弟会の手引書（17世紀末）—レンヌの霊性ととともに

#### 3-1. レンヌの霊性

17世紀に、ナントの兄弟会の熱気に立ち会い、聖顔の信心の手引書『聖ヴェロニカへの信心』を著したアントナン・トマ（Antonin Thomas, 1631-1701）は、レンヌ（Rennes）に生まれた。彼は1653年に、レンヌから約50キロ北にある町ディナン（Dinan）のドミニコ会修道院に入会し、モルレ（Morlaix）での養成期間を除き、ディナンで生涯を過ごしたと見られているが<sup>33</sup>、修道会のネットワークにより、ナントのドミニコ会修道院とも密接なつながりをもっていたのだろう。彼は1694年に『聖ヴェロニカへの信心、あるいはわれらの主イエス・キリストの聖なる顔になされた卑劣な行為と侮辱の償い』をバリで刊行し、1696年に『罪の償いと冒瀆の根絶のための神とキリストの至聖なる名への信心』をレンヌで刊行している<sup>34</sup>。この2冊のタイトルからうかがえるのは、神への冒瀆が日常化し、受難のキリストの顔とキリストの名をあがめることによって、冒瀆の罪を償おうとする人々の意識が顕在化したことである。

こうした意識が醸成された背景には、トマの出身地レンヌの特殊な土地柄もあったと思われる。レンヌは、17世紀にカルメル会内部の対抗宗教改革運動が起こった土地であり、レンヌを起点にブルターニュ、トゥーレーヌ地方一帯に広がり、他地域にも波及して、「トゥーレーヌの改革」（Réforme de Touraine）と呼ばれるようになった<sup>35</sup>。カルメル会修道士フィリップ・ティボー（Philippe Thibault, 1572-1638）らによって推進された改革運動の霊性を担ったのが、レンヌのカルメル会助修士で盲目の聖サンソンのジャン（Jean de Saint-Samson, 1571-1636）<sup>36</sup>である。彼

<sup>33</sup> « Thomas, Antonin », *Dictionnaire de spiritualité*, t. 15, 1991, col. 891.

<sup>34</sup> *La Dévotion à la sainte Véronique, ou la Réparation des ignominies et des outrages faits à la Face sacrée de Notre Seigneur Jésus-Christ représentée dans le voile de sainte Bérénice*, Paris, L. Guérin, 1694. *La Dévotion aux très saints Noms de Dieu et de Jésus pour la réparation et l'extirpation des jurements et des blasphèmes*, Rennes, 1696.

<sup>35</sup> « Carme », « La réforme de Touraine et Jean de Saint-Samson », *Dictionnaire de spiritualité*, t. 2, col. 169. Dinzelbacher, P., Hogg, J. L. 『修道院文化史事典』朝倉文市監訳、八坂書房、2014、p. 395.

<sup>36</sup> Jean de Saint-Samson, *La Vie, les maximes et partie des œuvres du très-excellent contemplatif, le vénérable Fr. Jan de S. Samson*, aveugle dès le berceau, et religieux laïc

は、カルメル会の本質である念祷と黙想への回帰を促し、キリストへの愛、自己を無とし神と一致することを実践し、教えた。受難のキリストを見つめる霊性は、沈黙と孤独、神との対話の中でこそ生まれ、深められるものであり、その霊的土壌を作ったもののひとつが、カルメル会の観想生活の伝統とレンヌの土地であったのだろう。こうした傾向は、ほかの修道会にも、そして次の時代にも波及し、共有されていく。

レンヌのカルメル会改革運動の中で深められた祈りと観想の伝統が、聖顔の神秘に出会う基礎を作り、聖顔の信心を担うもう一人の人物、聖ピエールのマリー（Marie de Saint-Pierre, 1816-1848）も、19世紀にレンヌで生まれている。彼女はレンヌで幼少期を過ごしたあと、トゥールのカルメル会修道女となり、トゥールで聖顔のメッセージを受けとり、トゥールが聖顔の信心の新たな拠点となっていく<sup>37</sup>。

### 3-2. ナントの信心会の手引書『聖ヴェロニカへの信心』（1694）

レンヌ出身で、ディナンのドミニコ会修道士であったアントナン・トマが、ナントの兄弟会のために『聖ヴェロニカへの信心、あるいはわれらの主イエス・キリストの聖なる顔になされた卑劣な行為と侮辱の償い』を執筆するわけであるが、それはどのような動機からだったのだろうか。冒頭の「われらの主イエス・キリストへの献辞」に、イエスに語りかけるかたちで、次のような説明がある。

あなたの聖なる御顔<sup>みかお</sup>に対して、不信心な人々が行ってきた、そして今なお罪人たちが日々行っている侮辱と辱めの償いをしたいという正当な熱意が、私を駆り立て、この小さな作品を書かせたのです。[...] 傷つき、汚され、血まみれのあなたの尊き御顔は、ユダヤ人たちの同情をかきたて、あふれる涙を流させるべきであったのに、これら不信心で残酷な人々には、軽蔑とあざけり、さ

---

de l'Ordre des Carmes Réformez, par le R. P. Donatien de S. Nicolas, Paris, 1651 ; *Les Œuvres spirituelles et mystiques du divin contemplatif F. Jean de S. Samson*, Rennes, 1658-1659. 鶴岡賀雄「十字架のヨハネを超える！？—聖サムソンのヨハネ—瞥」、『創文』428号、2001年1月、p. 23-26.

<sup>37</sup> 拙論「フランスにおける聖顔の信心—カルメル会、クローデル、ルオー」、『人文学報』第517号、2021、p. 155-162.

らには恐怖と憎悪の対象でしかなかったのです。世の賢者たちも、あなたがこのような嘆かわしい状態にあるのを見て、弱く惨めな対象と見なしているのです。[…]

ですから、どうか、主よ、あなたの神聖なる御顔の光で私たちの精神を照らしてください。これらのとげと傷、血と唾とをとおして、私たちがあなたの無限なる愛と、あなたの正義と謙遜の、感嘆すべき効果を見出せますように。そして私たちの心が、あなたの神聖なる愛によって燃え立たされ、あなたが受けた苦しみと辱めを鋭く感じとれるようになれますように<sup>38</sup>。

宗教改革、宗教戦争後の時代を生きるアントナン・トマは、前世紀までの兄弟会の霊性を、侮辱され、傷つけられたキリストを見つめる信心へと収斂し、言語化していく。『聖ヴェロニカへの信心』は、以下の構成で書かれている。

われらの主イエス・キリストへの献辞

ナントで創設された、いとも敬虔な聖ヴェロニカ兄弟会員諸氏への書簡  
序文

聖ヴェロニカへの信心

第1章 なぜ救い主は、敬虔なベレニスのヴェールに聖顔を刻印したか

第1の理由 女性信者たちの敬虔な好奇心を満たすため

第2の理由 教会に永久的な記念として残すため

第3の理由 罪の不吉な特徴を思い出させるため

第4の理由 ベレニスの信仰心に報いるため

第5の理由 はかない美しさを軽んじるよう女性に教えるため

第2章 イエス・キリストの顔の感嘆すべき美しさ

第3章 神の子がその聖顔に受けた侮辱と恥辱

第1節 神の子はなぜ恥辱と辱めに身をゆだねたか

第2節 ユダ、口づけによってイエスを裏切る

<sup>38</sup> 以下の引用は1889年の第2版による。Antonin Thomas, *La Dévotion à la Sainte-Véronique*, nouv. éd. revue et annotée, Tours, Oratoire de la Sainte-Face, 1889, XLIII p.+192 p., p. 3-5.

第3節 イエス、その繊細な顔に平手打ちを受ける

第4節 兵士たち、イエスの顔を覆う

第5節 ユダヤ人たち、イエスの顔に唾を吐く

第6節 兵士たち、イエスの顔のひげをむしる

第7節 ユダヤ人たち、イエスよりもバラバを好む

第8節 イエス、茨の冠をかぶせられる

第9節 イエス、茶番劇の王のように、からかいによって迎えらるる

第4章 侮辱され、変わり果てたイエス・キリストの描写と、聖顔のあわれな顔  
立ちに関する省察

聖おとめとの対話

われらの主の心情についての考察

愛情と決意

第5章 信者たちが、われらの主イエス・キリストの聖顔に、名誉の償いをしなければならない理由

第1の理由 正義によって、私たちはイエス・キリストの聖顔の名誉を償わずにはいられない

第2の理由 聖三位一体は、私たちが聖顔の名誉の償いをすることをどれほど快く受け入れるか

第3の理由 われらの主が、聖ヴェロニカをあがめる人々のために行う奇跡

第6章 われらの主の聖顔の名誉を敬虔に償うための方法と実践

第1の方法 イエス・キリストの姿を心に写しとり、模範とすること

第2の方法 イエス・キリストの聖顔を汚す罪の輪郭を、魂から消し去ること

第3の方法 イエス・キリストの徳にならうこと

第4の方法 聖ヴェロニカを敬虔な挨拶でたたえること

第5の方法 兄弟会で複数の人々が連合し、より荘厳な償いをすること

第6の方法 救い主が受けた侮辱を思い、何らかの悔悛の業を行うこと

第7章 聖ヴェロニカへの信心の大きな実り

第1の実り この信心によって、人はあらゆる種類の善を獲得する

第2の実り 聖ヴェロニカへの信心は、キリストの優しいまなごしを私たちのほうへ引き寄せる

第3の実り 聖ヴェロニカへの信心は、キリストへの愛で心を燃え上がらせる

第4の実り 聖ヴェロニカへの信心は、魂を罪から引き出し、もっとも激しい情熱を静める

第5の実り 聖ヴェロニカのまことの信者は、最後の審判の日に、愛すべきキリストの顔を恐れなく、信頼をもって見ることができる

以上の7章構成で、聖顔が残された理由、聖顔が受けた侮辱、償いが必要な理由、償いの実践法、信心の実りが述べられているが、ここでは次の3点について、アントナン・トマの考察を要約する。

- a. アントナン・トマは、ヴェロニカ伝承をどのように伝えているか
- b. 受難のキリスト像は、なぜ残されたか
- c. 聖顔の信心は、どのような形で実践されていたか

a. アントナン・トマによるヴェロニカ伝承

アントナン・トマは、ヴェロニカの伝承、ヴェロニカの名の由来、当時のサン・ピエトロ大聖堂の様子を素朴に伝えている。

古くからの伝承によれば、イエス・キリストが十字架を担ってゴルゴタの丘に向かっていたとき、ベレニスという名のユダヤ人の女性が、汗と血と唾にまみれた顔を拭うよう、ヴェールを差し出し、イエスはそこにご自分の肖像を刻印したのだった。

この奇跡の絵は「聖ヴェロニカ」と呼ばれている。真の肖像を意味する「ヴェラ・イコン」の二語に由来し、形が崩れ「ヴェロニカ」となった。この絵はローマにもたらされて以来、大いなる崇敬をもって、今もローマに保存されている。サン・ピエトロ大聖堂では、毎年聖金曜日に公開されている。信者は大きな敬意と信心をもって、各地からやってきて、ヴェロニカを訪れ、あがめている (p. 12-13)。

アントナン・トマは、中世以来の伝承を受け継ぎ、ローマのヴェロニカを奇跡の肖像とみなしている。またベレニスが、皇帝ティベリウスの病氣治癒のあと、ローマ



にやってきて、ペトロや弟子たちと過ごし、亡くなるときにヴェロニカを教皇に託したという伝説を信じている (p. 120)。17世紀の時点で、1011年にローマにもたらされた肖像は失われていたと見られるが<sup>39</sup>、何らかのヴェロニカが公開されている。また、ヴェロニカと呼ばれる聖像が各地に伝わり、崇敬の対象となっていたことも記している。

聖ヴェロニカの奇跡の図像は数多く、さまざまな場所で見られる。これらの図像がもたらした大きな奇跡の話も、私はいくつも読んでいます。聖ヴェロニカをたたえて創設された信心会も複数ある。しかし、この信心に私たちを駆り立て、聖顔をたたえる方法を教える本は存在しない (p. 15)。

聖顔の図像が広まり、崇敬の対象となる一方、聖顔の信心をどのように深め、実践するか、手引書がなかったことが、アントナン・トマの執筆動機となったことがわかる。『靈性事典』では、アントナン・トマ以前に、『おお、わが救い主の顔よ、誰があなたをかくも傷つけたのか?』(リエージュ、1638)、『聖顔の信心会の起源』(ドゥーエ、1681) が出版されていることが指摘されており<sup>40</sup>、フランドル地方に先行例が存在するが、聖顔の信心の理由、方法、実践、実りまでを体系的に記した書物としては、フランスでおそらく最初のもののだろう。

聖顔の信心の背景には、受難劇の上演、聖骸布公開の影響もあると考えられるが、アントナン・トマの記述からは、聖骸布を見た、あるいは念頭に置いている気配は感じられない。たしかに、聖骸布は1453年以降、サヴォワ公国の所蔵となり、1578年にトリノに移されていた<sup>41</sup>。15世紀なかばまでは、フランス国内の複数の場所で展示されていた聖骸布も、17世紀のブルターニュでは、巡礼に出かけないかぎ

<sup>39</sup> 「中世の巡礼が拝礼していたオリジナルのヴェールはもはや存在しない」(Ian Wilson, *The Turin Shroud*, London, 1979, p. 120 ; 『トリノの聖骸布』 p. 144)。Ian Wilson, *Holy Faces, Secret Places*, 1991, 図 I. Gaetano Compri 『キリストと聖骸布』 p. 191.

<sup>40</sup> Jean-Augustin Robilliard, « Face (Dévotion à la sainte Face) », *Dictionnaire de spiritualité*, t. 5, col. 30-31. *O Face de mon Sauveur, qui vous a ainsi navrée ?*, Liège, Ouwerx, 1638. C. Pora, *L'Origine de la confrérie de la Sainte Face*, Douai, Serrurier, 1681.

<sup>41</sup> Gaetano Compri 『これこそ聖骸布』 p. 105.

り、人々が直接見る機会にはなかったものと思われる。その代わりにナントでは、ブルターニュ公ジャン5世がローマからもち帰ったとされる「ヴェロニカ」が、由緒ある聖遺物としてあがめられていたのだろう。ナントの「ヴェロニカ」は聖遺物を指し、伝承の女性の名は「ベレニス」(Bérénice)であることを、アントナン・トマは強調する。

注意しなければならないが、複数の作者が、われらの主にヴェールを差し出したこの敬虔な婦人にヴェロニカの名を与えている。主はこのヴェールにその聖なる顔の輪郭を刻み、このヴェールをわれわれは「聖ヴェロニカ」と呼んでいる。また別の作者たちは、彼女の固有名である「ベレニス」の名で呼んでいる。なぜなら彼女はただ、この貴重な聖遺物の幸いなる受託者であったために「ヴェロニカ」と呼ばれたからである。これらを区別するために、本書では常に「聖ヴェロニカ」は主の聖顔の像を指し、「ベレニス」はその像の幸いなる受託者を指すものとする (p. 16-17)。

中世の受難劇ではベレニス、ヴェロンヌなどと呼ばれ、布は聖骸布の影響で「シンドン」、「シドワース」などと呼ばれていた。「ヴェロニカ」は、布を差し出し、受けとった女性の名とイコンの意味とをあわせもつ名とされていくが、アントナン・トマは「ヴェロニカ」を、イコンを指す語に限定して使っている。

ベレニスという名の女性は、新約聖書外典の『ニコデモ福音書』に登場していた。イエスの衣のふさに触れて長血の病を癒され、その治癒奇跡を総督ピラトのもとで証言する女性である。アントナン・トマは、ベレニスについて、「この敬虔な婦人 (matrone: 威厳を備えた年配の女性) は、神の聖母との友情と、特別な親しさをもつ榮譽を得た」(p. 39)<sup>42</sup>としている。そして、彼女が十字架の道行きでとった行動を、次のように伝えている。

<sup>42</sup> リモージュの初代司教、聖マルシアル伝に書かれているという。出典は記されていないが、1676年に出版された『聖マルシアル伝』にもたしかに記述がある。ただし « Véronique » とされている (Bonaventure de Saint-Amable, *Histoire de saint Martial, apôtre des Gaules*, Clermont, 1676, p. 516)。

彼女の行動が、賞賛と永久的記憶に値するものであることも認めなければならない。なぜなら、忍耐強いイエスは、激しい鞭打ちですりむけた肩に、重い十字架を担い、疲労と衰弱で汗をかき、血と力がほとんど尽きようとしていたからである。死刑執行人たちは、ピラトの官邸から1321歩<sup>43</sup>の、苛酷で困難な道をとって、イエスをゴルゴタの丘へと導いていた。彼らはイエスを早く死なせたい苛立ちから、残酷さの極みで、イエスを足蹴にし、棒で打ちながら、追い立てていた。しかしイエスが衰弱して、ほとんど一歩ごとに転倒したため、彼らはイエスが道の途中で死ぬことを恐れ、一息つかせることを余儀なくされた。それゆえ彼らはイエスを、ベレニスという名の、あの誠実で敬虔な寡婦の家のそばに座らせたのだった。

大勢の群衆が、このおとなしい無辜<sup>むこ</sup>の羊についていき、彼が極限状態にあるのを見ていたのに、その中の誰一人として、彼に少し飲みものを差し出そうという願いも思いも示さなかったのは奇妙なことである。荒野で食事を与えられた5000人の人々も、麻痺や病気を癒してもらった人々も、悪魔から解放してもらった人々も、誰一人、その恩人に同情しなかった。友人たちも、弟子たちも、姿を見せ、話しかけようとはしなかった。聖母さえ打ちひしがれて、イエスに近づき、慰めを与えることはできなかった。祭司長たちとファリサイ派の人々は、イエスが死にかかっているのを見てよろこび、彼の苦しみをあざ笑っていた。そして、その他すべての人々は、この悲劇的な見せ物の最後を見届けようと、好奇心からイエスについていった。彼らはイエスを、神と人間から呪われた男と見なしていた。なぜならイエスは、十字架という恥ずべき刑罰を宣告されていたからである。「木にかけられる者は、神から呪われている」（申命記21章23節）。

たしかに、何人もの女性たちが、泣き、嘆きながら、イエス・キリストのあとについていった。しかしそれは自然なあわれみでしかなく、イエスは彼女らの涙からいかなる慰めも受けなかった。それどころかイエスは、私の不幸を泣

<sup>43</sup> 19世紀のエルサレム案内にも、「1321歩、あるいは3303ピエ」とある（L'abbé André Dupuis, *Introduction au plan de Jérusalem et de ses faubourgs*, Paris, Nantes, 1841, p. 152）。アレクサンドル・デュマの未完の歴史小説『イザーク・ラクデム』（第1部17章）に同じ記述がある（Alexandre Dumas père, *Isaac Laquedem*, 1853）。

くな、むしろ子どもたちと自分自身のために泣け（ルカ23章27-28節）、と言ったのである。ただベレニスだけが、やさしいあわれみの気持ちから、イエスを慰めたいと思い、兵士たちの怒りを恐れることなく、群衆を勇敢にかきわけ、忍耐強いイエスに近づき、汗に濡れ、血と唾にまみれた聖なる顔を拭うために、頭の白いヴェールを、まことに大いなる敬意をもって、イエスに差し出したのである（p. 39-42）。

ベレニスのとった行為はイエスにとって快い慰めとなり、イエスはただちに奇跡を起こして、顔を拭ったヴェールに刻印を残し、「血と汗と涙の浸みこんだ布」という「貴重な贈り物」を残した（p. 43）。それゆえベレニスは、キリストの顔を人々にもたらしした「主の御顔の天使（*Angelus faciei ejus*）」[イザヤ書63章9節]である（p. 43）。ヴェロニカの布は、神が地上との契約のしるしとしてノアに見せた虹のように、「神のあわれみを人間のもとに引き寄せる虹」として人々のもとに残されたのである（p. 153）。

#### b. 受難のキリスト像は、なぜ残されたか

キリストは聖書において、「すべての民が待ち望む者」（ハガイ書2章8節）と言われ、「その顔を見ることを、全地の人々が望んできた」（列王記上10章24節）。それゆえ、イエス自身「あなたがたが見ているものを見る目は幸いだ。なぜなら、多くの預言者たち、多くの王たちは、あなたがたが見ているものを見たいと願ったが、見るができなかったからだ」（ルカ10章23-24節）と言ったのである。人々はイエスを見、話を聴くために群れをなして押し寄せたが、同時代に生きられなかった人々のため、この世を去るとき、血と汗と涙による刻印を残した。しかしなぜ、受難のときの悲しくあわれな顔なのか？ 栄光に輝くキリストの顔は、天国の至福なる住人たちのよろこびの対象であり、地上の私たちが日々黙想し、あがめ、模範とすべき対象は、恥辱と苦痛に歪んだキリストの顔だからである（p. 19-23）。キリストは苦しみと恥辱の中で、謙遜と忍耐によって悪魔の傲慢に打ち勝ち、そのしるしを教会に残した。また、受難という愛の記念を残すことで、実質的に、人間とともにありつづけることを望んだのである（p. 25-28）。

図像は、文字の読めない人も一目で読み解くことのできる、開かれた書物であ

る。福音書には、キリストが受けた苦しさの詳細が記されているが、すべての人が福音書を読めるわけではない。また、ヴェロニカの布に浮かぶキリストの顔は、この図像でなければ伝わらない表情を見せている。

人は、聖ヴェロニカの茨の冠や、打ち傷や、血痕や、唾を描くことはできる。しかし、イエスの顔に浮かぶ、心の悲しみと苦しみとを、どんな筆が、どんな色が表現することができるだろう？ 私たちはそれを表現するための思想も言葉ももたない (p. 103)。

このえも言われぬ図像は、残された人々がキリストを忘れないための形見でもある。友人が亡くなったり、長い間不在であったりすると、その人への愛情が消えたり冷めたりする。そうなるのを避けるため、私たちは絵に頼る。イエスは、私たちへのやさしさから、肉体的不在によって私たちがご自分を忘れないよう、私たちの愛が冷めないよう、この世を去るとき、ご自分の血と涙と汗で印したヴェロニカを残したのである (p. 163-164)。

### c. ナントの兄弟会の実践

ナントの兄弟会のために、アントナン・トマは具体的な実践法を提示している。聖ヴェロニカの信心をもつ者の「愛情と決意」として、彼はこう記している。

残された人生、私たちはできるかぎり敬虔に、あなたの名誉の償いをしていこうと決意しました。あなたがその聖なる顔に受けた苦痛と、ののしりと、屈辱は、私たちの日々の省察の主題となるでしょう。聖ヴェロニカは私たちの崇敬と、特別な信心の対象となるでしょう (p. 108)。

ヴェロニカの信心は、日々の黙想と外的実践からなる。最終章の第6章で、「主の聖顔の名誉を敬虔に償うための方法と実践」が説明される (p. 125-150)。

第1の方法 私たちの案内役となるため、地上に受肉し、受難の苦しみを耐え忍んだキリストの姿を魂の中に写しとり、キリストに倣うこと。聖ヴェロニカを注

意深く、敬虔に見つめ、その姿に似た者となること。

第2の方法 キリストの聖顔の輪郭を魂に受け取る準備として、罪を避け、あらゆる罪を魂から消し去ること。罪と侮辱は、キリストが受けた拷問を新たにし、「神の子を自ら再び十字架につけ、侮辱する」（ヘブライ人への手紙6章6節）ことだからである。

第3の方法 キリストが受難のときに示した徳にならうこと。謙遜、忍耐、神の意志に身をゆだねること、罪のいけにえとして身を捧げること、罪人への憐憫をもち、苦しみと侮辱によるこびをもつて耐えること、敵のために祈ること。聖ヴェロニカのメダイユや版画を身につけ、頻繁に見つめ、キリストが受けた侮辱を思い出し、キリストをあがめ、たたえ、愛すること。聖ヴェロニカの絵を家のもっとも美しい場所に飾り、その部屋に入る人がキリストを思い、崇敬のあいさつをし、受難の侮辱の償いができるようにすること。

第4の方法 毎日、または週に一度、72回のパテル〔主の祈り〕とアヴェ・マリアからなるロザリオ<sup>44</sup>を唱え、イエスの頭を突き刺した茨のとげの償いをする。あるいは、十字架像の足にくちづけをしながら、「キリストよ、われら、十字架によりて世をあがないたまひし御身をあがめ、たたえたまつる」<sup>45</sup>と唱えること。これに加え、アントナン・トマは「主の尊き御顔への祝詞」と題する祈りを綴っている。

神の子、主イエス、われ主をあがめ、たたえ、感謝を捧げます。御身は、被造物の中でもっともみじめなるわれのため、その聖なる体の両手両足、そしてとりわけもっとも高貴な部位なる、その神聖な御顔で苦しんでくださいました。あれほど残酷な侮辱、あれほどの辱めとののしりを償うため、わが虚無の奥にてひれ伏し、主をたたえます。おお、わが救いのため、不敬の兵士たちにより茨の冠をかむせられた、天使と人間との尊ぶべき頭よ。

わが罪ゆえに、涙と血に満ちた、御身の美しい目をたたえます。

打たれ、殴られ、あざができ、唾に汚された、愛すべき御顔をたたえます。

<sup>44</sup> 12の珠からなる小さなロザリオ (couronne) を使う。

<sup>45</sup> この祈りは、信心業「十字架の道行き」第一留の冒頭で唱えられる祈りでもある。

あれほどの冒瀆と、嘲弄と、ののしりの言葉に苦しめられた、聖なる耳をたたえます。

罪人に対しては、恵みとやさしさに満ち、われらの救いのためには、苦汁と酢を含まされた、聖なる口をたたえます。

軽蔑され、苦痛とともに引き抜かれた、尊いひげと、美しい髪をたたえます。

どうか、主よ、御身のいとも愛すべき御顔の威厳と、聖性と、慎ましさが、わが顔を聖化し、傲慢と虚栄によってわが魂を汚した、すべての罪を消し去ってくださいますように (p. 141-142)。

これらの祈りに加え、月に一度、聖ヴェロニカをたたえて聖体拝領をし、侮辱に対する忍耐、軽蔑への愛、謙遜の心、謙虚さを獲得することが、主をよろこばせる償いである。

第5の方法 祭司長や律法学者やファリサイ派の人々、そして兵士たちが、われらの主を非難し、殺すために団結したように、キリストを愛する者は兄弟会で団結し、信仰心と謙遜と崇敬によって、キリストが受けた侮辱と苦しみの償いをしなければならない。愛徳によって結ばれた人々が複数で行う礼拝は、よりいっそう神をよろこばせる。「もし2人か3人が、私の名において集まるなら、私は彼らの中にいる。彼らが求めるものはすべて与えられる」(マタイ18章19-20節)。できるだけあなたの友に説き勧め、もしナントのようなヴェロニカの信心会があるなら、この「神の顔の天使」(イザヤ書63章9節)たちに加わりなさい。

第6の方法 イエスが拷問と死の苦しみを受けることで、人間への無限の愛を示したように、私たちもキリストへの愛のあかしとして、また、キリストが受けた苦しみの償いとして、苦しみ、侮辱を耐え忍び、あるいは悔悛の業を行うこと。断食、節制、苦行衣などの苦行を自発的に行うこと。「キリストのものとなった人々は、自らの悪徳や欲望とともに、肉体を十字架につけてしまったのです」(ガラテヤの信徒への手紙5章24節)。「主が全身傷に覆われているのを見ると、私は傷と苦痛なしにいたくはありません」(聖ベルナル)。

ヴェロニカ像の黙想の手引きであると同時に、具体的実践法として、聖画の崇敬



の仕方、祈りの方法が記され、また、兄弟会での団結と苦行が勧められている。全体に流れるのは、暴力と辱めを受けたキリストを思い、その傷ついた顔をたえず見つめ、心に刻み、キリストを冒瀆した人々の罪を「償う」という心性である。受難を引き受け、人間を愛し抜いたキリストを思い、キリストの愛に打たれ、その愛に応えようとする熱意に貫かれている。

#### 4. トゥールの聖顔の信心会と手引書（19世紀後半）

ナントの信心会のために書かれ、1694年に出版されたアントナン・トマの『聖ヴェロニカへの信心』は、大革命の嵐のあと、聖顔（Sainte Face）の信心が生まれていたフランス中部の都市トゥールで再発見され、1889年に再版される<sup>46</sup>。トゥールは、ガリアの農村にキリスト教を伝え、フランスの守護聖人となる聖マルティヌス（Saint Martin de Tours, ca 316-397）<sup>47</sup>ゆかりの地であるが、1843年から1848年にかけて、カルメル会修道女聖ピエールのマリーが聖顔の啓示を受け、1851年、ローマのヴェロニカの複製が修道院のネットワークを通じて、トゥールの女子カルメル会修道院にもたらされていた。その一部が、聖顔の使徒となり、「トゥールの聖人」（saint homme de Tours）と呼ばれることになるレオン・デュポン（Léon Dupont, 1797-1876）に贈られ、聖顔の飾られたデュポン氏の客間で病気治癒と回心の奇跡が起きていく。1876年にデュポン氏が亡くなると、その客間は一般公開されて「聖顔の礼拝堂」（Oratoire de la Sainte-Face）となり、祈りをともにする人々の信心会が自然発生的に形成されていく。1884年、トゥール大司教により聖顔の信心会（Confrérie de la Sainte-Face）が公式に認められ、翌1885年、大信心会（Archiconfrérie de la Sainte-Face）昇格のための請願書（9月1日付）をローマ教皇レオ13世に提出すると、10月1日付の教皇書簡により、異例の速さで認可される<sup>48</sup>。ローマのヴェロニカは、トゥールでは「聖顔」（Sainte-Face）の名で定着し、

<sup>46</sup> Antonin Thomas, *La Dévotion à la Sainte-Véronique, ou la Réparation des ignominies et des outrages faits à la Face sacrée de Notre Seigneur Jésus-Christ représentée dans le voile de Sainte Bérénice*, Tours, Oratoire de la Sainte-Face, 1889, 192 p.

<sup>47</sup> 『世界歴史大系フランス史1』、野口洋二「キリスト教のガリアへの浸透」p. 424-425.

<sup>48</sup> Pierre Janvier, *Manuel de l'Archiconfrérie de la Sainte-Face*, 3<sup>e</sup> éd., Tours, 1895, p. 33-44 ; M. Dupont et l'Oratoire de la Sainte-Face, Tours, 1880, p. 62.

聖顔の礼拝堂での奉仕にあたる「聖顔の司祭団」(Prêtres de la Sainte-Face) がトゥール司教によって結成され、『聖顔年報』(*Annales de la Sainte-Face*) も発行されるようになっていた。書庫の奥で眠っていたアントナン・トマの本が、聖顔の司祭たちによって偶然に見つけられたときの驚きは、次のように記されている。

昨年 [1887年]、敬虔で堅実なこの作品が、それまですっかり忘れられ、眠っていた書庫から取り出されたのです。まず、本書を読んだ人々の間に、茫然自失するほどの驚きの瞬間が流れました。どうして、200年もの時を経て、互いに見知らぬ著者同士が、内容についても、またしばしば形式についても、これほど驚くべき仕方で出会うことができたのでしょうか？ どうして、17世紀のアントナン・トマ神父と、19世紀の『聖顔年報』の執筆者たちが、思想においてのみならず、表現においても、これほど密接に関連し合うことができたのでしょうか？ 両者はあまりに似通っているので、彼らが書いたものを読むと、もしこれが、よくある写生字の借用でないとしたら、共通の靈感を受けていると容易に思うことでしょう。[…]

アントナン・トマ神父の作品に唯一欠けている視点は、われわれの悲しき時代の、今日的で本質的な、社会的償いの視点です。そのことで彼をあまり厳しく批判せず、むしろそのことで彼を祝福しましょう。今再び明らかにされる彼の作品には、その主題が欠けていますが、それは彼が幸運にも、この社会的罪が存在しない時代に生きていたためなのです。その罪が今日存在し、日に日に大きくなっていると言えます。主が、修道女聖ピエールへのメッセージの中で、社会的罪の償いについて強調しているのは、そのためであると思われます。その罪は、とりわけ一般に行われている冒瀆の言葉と、社会全体で行われている主日の冒瀆にはっきり現れています。それゆえ、「トゥールの聖人」と彼の業の後継者たちが、よみがえった聖顔の信心に刻みこんだ方針において、とりわけ社会的償いが目標とされているのです (p. XVI-XVIII)。

この文章を書いたのは、トゥールの司教座聖堂参事会員神学博士B.Th. プアンであり、この「前書き」と、聖顔の司祭P. ジケロによる「ナントのヴェロニカ信心会略史」が添えられて、アントナン・トマのテキストは忘却から救われることにな

る<sup>49</sup>。本文は1694年版の忠実な再録であるが、聖書引用の出典が補われ、若干の註が施されている。また、1694年版には図版がなく、ナントで崇敬されていた聖顔の図像は確認できないが、トゥールの再版では、トゥールで崇敬されていた聖顔の図版が冒頭に掲げられている【図2】。ローマのヴェロニカも、トゥールにもたらされた版画も、同じモデルから生まれているため、おそらくは類似した図像の別のヴァリエーションであると思われる<sup>50</sup>。

本書の再版以前に、トゥールの大司教座聖堂参事会長で、聖顔の信心会と聖顔の司祭団の指導者であるピエール・ジャンヴィエ（Pierre Janvier, 1817-1888）が、信心会のためのマニュアルと、聖顔に関する本を次々出版していた。アントナン・トマの『ヴェロニカの信心』再版（1889）は、『聖顔の信心会の手引き』（1880）と『聖顔の大信心会の手引き』（1895）の間の時期にあたる。ジャンヴィエ神父の聖顔に関する出版物は、①②デュボン氏と聖顔の礼拝堂に関するもの、③聖ピエールのマリー自叙伝（ジャンヴィエ編纂）、④聖顔の歴史、⑤⑥聖顔の信心会の手引きである。

① *Vie de M. Dupont, mort à Tours, en odeur de sainteté, le 18 mars 1876*, Tours, Oratoire de la Sainte-Face, éd. abrégée, Tours, Oratoire de la Sainte-Face, Paris, Larcher, 1881, in-16, 502 p. (1<sup>re</sup> éd. 1879, 2 vol. in-8.)

『デュボン氏の伝記—1876年3月18日、聖性の芳香のうちにトゥールにて死去』、トゥール、聖顔の礼拝堂、縮約版、トゥール、パリ、1881年（初版1879年）  
デュボン氏の慈善活動、回心、使命、聖ピエールのマリーとのつながり、ラ・サレット、慈善活動、夜間礼拝、聖書、聖顔の信心のはじまり、ローマのヴェロニカ（p. 227-228）、聖顔の信心第2～4期・最終期、ルルド、プロシア軍の占領、

<sup>49</sup> Dr B.-Th. Pouan (chanoine théologal de l'Église de Tours), « Avant-Propos » (novembre 1888), p. VII-XIX ; P. Giquello (prêtre de la Sainte-Face à Tours, premier évêque de Nantes), « La Confrérie de la Véronique de Nantes : notice historique » (octobre 1888), p. XXI-XLIII.

<sup>50</sup> 聖骸布の研究者、イアン・ウィルソンやガエタノ・コンプリ神父が指摘しているように、長い歴史の中で描かれてきたキリストの図像は、同じモデル（トリノの聖骸布のキリスト）から発していると見ることができる。Ian Wilson『トリノの聖骸布』p. 131, 135. Gaetano Compri『聖骸布』、カラー図版C40-C89；『これこそ聖骸布』p. 80-81.

コミュニオン、ボンマン、孤立と苦しみ、最後の病、死、聖顔の礼拝堂

- ② *M. Dupont et l'Oratoire de la Sainte-Face. Notice historique*, 3<sup>e</sup> éd. refondue, Tours, Oratoire de la Sainte-Face, 1880, 70 p. 『デュボン氏と聖顔の礼拝堂 略史』、トゥール、聖顔の礼拝堂、1880年

デュボン氏の青年期から死まで (I-XII章、p. 5-57)。聖顔の礼拝堂、聖顔の司祭、聖顔の信心会 (XIII-XV章、p. 58-69)。デュボン氏の住まいが聖顔の礼拝堂となり、多くの信者や巡礼者が集まるようになったことに伴い、「聖顔の司祭」がトゥール司教によって創設された。彼らはデュボン氏の家で共住しながら、聖務、信心業、礼拝、黙想、礼拝堂を訪れる信徒や巡礼者の対応に奉仕した。「巡礼者への案内」(巻末)：聖顔の礼拝堂での聖務、信心業、集い。毎朝6時、7時、8時にミサ。毎朝7時のミサのあとと、夕方5時に聖顔の連祷。毎月最終日曜日の夕方5時に信心会の集い。毎月第2金曜日の夕方5時に十字架の道行き。毎週火曜日の夜9時半から水曜日の朝5時まで夜間礼拝。毎月最終水曜日の朝5時から夕方5時まで日中礼拝。毎年、枝の主日から聖金曜日にかけて、償いの大巡礼。礼拝堂は毎日朝5時から夜7時まで巡礼者に開かれている。

- ③ *Vie de la Sœur Saint-Pierre, carmélite de Tours, écrite par elle-même*, mise en ordre et complétée à l'aide de ses lettres et des annales de son monastère, par M. l'abbé Janvier, 2<sup>e</sup> éd. augmentée des prières et exercices de réparation de la Sœur Saint-Pierre, Tours, Oratoire de la Sainte-Face, Monastère du Carmel, 1884, 502 p. (1<sup>re</sup> éd. 1879)

ジャンヴィエ神父編纂『トゥールのカルメル会修道女聖ピエールのマリー自叙伝』、トゥール、聖顔の礼拝堂、カルメル会修道院、1884年、第2版(初版1881年)

ブルターニュの少女、召命、トゥールのカルメル会、修道誓願、金の矢、罪の償い、信心会、小さな福音書、聖顔、ヴェロニカとよき泥棒、ラ・サレット、フランスの罪、大信心会、病気と死、墓。マリーが作った祈り (p. 461-495) [信心会の手引きに再録される]。神の名の冒瀆の償いのための祈り、冒瀆の償いのための聖顔の連祷、聖顔の賛歌

- ④ *Le Culte de la Sainte Face à Saint-Pierre du Vatican et en d'autres lieux célèbres, notices historiques*, Tours, Oratoire de la Sainte-Face, 1890, 7<sup>e</sup> éd., 168 p. (1<sup>re</sup> éd. 1883, in-18, 123 p.)

『ヴァティカンのサン・ピエトロ大聖堂とその他有名な場所における聖顔の信心』、トゥール、聖顔の礼拝堂、1890年、第7版（初版1883年）

各地に伝わる聖顔の略史 Vatican/Laon/Jaen/Osa de la Vega/Alicante/Lucca/Tours/Edessa/結論 聖顔のための祈り、聖顔のミサ ほか

- ⑤ *Manuel de la Confrérie de la Sainte Face, pour la réparation des blasphèmes et de la profanation du dimanche*, Tours, Juliot, 1880, in-18, 132 p.

『聖顔の信心会の手引き—冒瀆と主日の瀆聖の償いのために』、トゥール、1880年  
 トゥールの聖顔の図版／予備知識 I. 信心会の目的 II. 信心会の目標 II. 償いの方法 IV. 信心会の模範 V. 信心会の図像 VI. 信心会の十字架 VII. 特典 VIII. 祝日と守護聖人／信心会の規則／冒瀆と主日の瀆聖の償いのための祈り／聖顔の連祷／聖ピエールのマリーの敬虔な考察 I. イエスの聖顔と聖名 II. 償いの業の二重の目的 III. 償いの目に見えるしるしとしての聖顔 IV. 敬虔なヴェロニカの役割について V. 聖顔の効力 VI. 聖顔とフランス VII. 聖顔は三位一体を表す VIII. 償いの業の必要性／十字架の道行き／聖顔のスカプラリオとロザリオの祈り／聖アウグスティヌスによる聖顔の祈り／デュボン氏による聖顔への祈り／聖顔の写真、あるいは図像について

付録 至聖なる神の名の小聖務日課／冒瀆の償いのための祈り／神の聖名の栄光のための祈り／冒瀆の償いのため、至聖なるイエスの名をたたえる祈り／聖顔の賛歌 ほか

- ⑥ *Manuel de l'Archiconfrérie de la Sainte Face*, Tours, Oratoire de la Sainte Face, 1895, 3<sup>e</sup> éd., 288 p. (1<sup>re</sup> éd. 1886)

『聖顔の大信心会の手引き』、トゥール、聖顔の礼拝堂、1895年、第3版（初版1886年）

『聖顔の信心会の手引き』（1880）を土台に、大幅に加筆改訂したもの。

聖顔の版画／大信心会入会条件／トゥール大司教の出版許可

第1部 公式文書と考察 聖顔の信心会設立に関するトゥール大司教令／信心会に贖宥を与えるレオ13世の教皇書簡／大信心会への昇格を求めるジャンヴィエ神父から教皇への嘆願書／大信心会設立を許可する教皇書簡／大信心会の規則／信心会会員への助言／加入手続き／聖顔の信心の概要／聖顔の版画について／聖ピエールのマリーによる聖顔についての敬虔な考察 ほか

第2部 連祷と祈祷文 聖顔の連祷／聖書による聖顔のための祈り／聖顔に侮辱を受けたイエスへの祈り／主への償いの祈り／聖アウグスティヌスの祈り／デュボン氏による聖顔への祈り／聖顔の賛美／聖ルイの40日間の祈り／金の矢の祈り

第3部 信心業 小さな十字架の道行き／償いの祈りと実践／聖顔の賛歌 ほか

第4部 付録 聖顔のための十字架の道行き／神の名とイエスの名のための祈り／聖顔のスカブラリオ／聖顔のための祈り／聖顔のためのロザリオ／小さな袋／<sup>サシェ</sup>悲しみの聖母のための7回のアヴェ／7つの悲しみの聖母のロザリオ／聖顔の福音書／聖顔のためのミサ／神の名の小聖務日課  
聖顔の巡礼者と文通者への助言／聖品カタログ

以下、『聖顔の大信心会の手引き』より、トゥールの大信心会の要点と、ヴェロニカに関する箇所のみ抄訳する。

## 大信心会入会条件

- 1 トゥールで設立された大信心会登録簿に登録してもらうこと
- 2 入会証明書とともに規則を受け取ること
- 3 大信心会のために、ラテン語かフランス語で毎日次の祈りを唱えること。パテル、アヴェ・マリア、グロリア、「主よ、御顔を見せ、われらを救いたまえ」（詩篇79 [80] 篇20節）
- 4 聖顔の小さな肖像か、十字架か、メダイユか、スカブラリオを身に着けること
- 5 できるだけ毎月の集いに参加すること
- 6 救い主の痛ましい御顔への信心をできるかぎり広めること

## 大信心会における聖顔崇敬の一般概念

### I. 聖顔崇敬の目的

聖顔の大信心会は、受難の際に侮辱を受け、変わり果てた主の顔への特別な信心

を表明する (p. 76)。

## II. 実際の目的

今日、神の名の冒瀆が前代未聞の大胆さで行われている。現代の冒瀆者は、教義の真実性、福音書の教え、秘跡の実践、教会そのものの存在権についてキリストを責め立てている。学術的と称する教義上の冒瀆が、秘密結社の中でなされ、新聞雑誌、パンフレット、本の中で繰り広げられ、あらゆる階層、年齢の人々を毒している (p. 79)。

主日 (日曜日) の瀆聖が公然と行われている。7日目の聖化と休息はもはや、ごくわずかなキリスト教徒によってしか守られていない。人々は大都市でも、寒村でも、聖日を守らず、無関心をもって、良心の呵責もなしに、職人の仕事場や商人の売り場で働き、家の中でも、公共の場でも汚している。神の掟に背く違反が、社会的罪の状態にまで高まっている。主日の瀆聖はかつてもあったが、今日ほど一般的に侵されたことはなかった。この罪の償いは、喫緊の必要である (p. 79-80)。

## III. 償いの方法

償いの業の担い手として、聖顔の大信心会は、受難の日に打ち傷をつけられ、罵倒され、汗と血に覆われた主の顔を天の父に見せ、私たちのために苦しみ、私たちの忘恩と罪をあがなったキリストを見、われらをお赦しくださいと祈る (p. 83)。

## IV. 償いの模範

十字架の道行きで、汚され、殴られ、血を流したキリストの顔を見て、あわれみに駆られ、人々の嘲弄をものともせず、イエスのもとに駆け寄った勇敢なヴェロニカが模範である。彼女は虐待者たちの蛮行に立ち向かい、群衆をかきわけ、イエスのもとにたどりつき、上質な亜麻布の白いヴェールでイエスの痛々しい顔をやさしく拭い、こうしてイエスの苦しみを和らげ、力づけたのである。これが、苦しみの道でキリストにささげられた最初の償いの業であった。この行為は「十字架の道行き」第6留で伝えられ、奇跡のヴェールはヴァティカンのサン・ピエトロ大聖堂に保存されている。聖ピエールのマリーが受け取ったメッセージによれば、償いの業の模範としてヴェロニカが与えられた。19世紀という、教会がはい上がるゴルゴタの丘において、ヴェロニカの手本がキリスト教徒を勇気づけるだろう (p. 84-85)。

## V. 大信心会の図像

大信心会であがめるのは、ローマのヴェロニカの布に刻まれたキリストの顔であ



る<sup>51</sup>。実物はローマで、真の十字架の木や、聖なる槍の刃と同じように聖遺物として崇敬され、特定の日に聖堂内で荘厳に公開されている。布に描かれた複製も、それが真正なものであるという印があれば、奇跡のイコンと同じ特権をもつ。1848年、政治情勢の危機により、教皇ピウス9世がローマを離れて以来、聖顔の複製の多くがキリスト教徒、とくにフランス人の手に渡った。ローマから最初に届いたイコンのひとつが、1851年、摂理によってトゥールのデュボン氏の手に落ちた。この偉大なる神のしもべ、償いの熱心な使徒は、客間に聖顔を飾り、昼夜ランプを灯し、25年間聖顔をたたえ、数々の恵みを受けつづけた。キリストの顔は、<sup>エツチエ・オモ</sup>〈この人を見よ〉や、タボール山の変容における荘厳のキリスト像など、さまざまな図像があるが、大信心会ではこのローマの聖顔の複製を勧める (p. 87-89)。[聖顔の図像は巻頭に掲げられている。]

### 聖顔の表情の描写

実際、この聖画を信仰の目で見つめると、芸術的観点からでさえ、また、その古さや、奇跡的起源について語らなくても、魂を償いの業に向かわせる、感動的な外観をもっていることに気付く。悔恨の深い感情なしに、血に染まる救い主の顔、腫れあがり、半ば閉じられた目、青白く、打ち傷のついた顔を見つめることはできない。右頬には、傷のほか、アンナスの家で残酷きわまりなくイエスを殴った鉄の手袋の跡、左頬には、複数の唾の汚れが見分けられる。鼻はつぶれ、血が流れ、口は開き、血があふれている。歯はぐらつき、ひげと髪の毛は複数箇所でむしられている。このように損なわれ、変わり果てた至聖なるイエスの顔は、それでもなお全体



図2  
トゥールの聖顔

<sup>51</sup> 1849年1月、ローマ教皇の亡命のさなか、神の慈悲を願い、サン・ピエトロ大聖堂で聖十字架の木片とヴェロニカの布が公開されていた。公開から3日目、普段はほとんど何も見えないヴェロニカの布にキリストの顔がはっきりと浮かび上がり、人々の驚きと感動の中、ただちに報告書が作成されたという (*Vie de M. Dupont*, 1881, p. 226-228)。

として、偉大さ、あわれみ、愛、悲しさの、えもいわれぬ混合を見せており、見る者すべてに強い印象を与える。血が流れるこれらの傷と、おぞましい唾の下に、キリスト教徒の魂は、神の威厳を認め、自分たちの忘恩の、心揺さぶるあがないを見て、悔い改めの思いに打たれ、大切なあがないの主に対し、甘美な信頼と、燃える愛に留保なく身をゆだねる (p. 90-91)。

### 聖顔の版画について

聖顔の版画は、ヴァティカンのヴェロニカのヴェールの複製である。[...] この版画はローマから来たものであり、教皇庁の保証付きで印刷されたものである。さらに、枢機卿の署名と印章が付され、この版画が、ヴェロニカのヴェールと、真の十字架の木と、主の槍の刃に触れたものであることを証明する認証がついている (p. 98-99)。

### 聖ピエールのマリーによる聖顔についての敬虔な考察

#### ヴェロニカとよき泥棒

救い主は修道女マリーに、受難の間、二人の人物が注目すべき役割を果たしていたことを教えた。一人目はヴェロニカである。彼女はゴルゴタの道で、愛すべき主のお顔を拭い、聖なる人性をたたえた。二人目はよき泥棒である。彼は十字架上で、説教壇にあるかのように発言し、もう一人の泥棒とユダヤ人たちからキリストが冒瀆されていたのに対し、キリストの大義を弁護し、キリストの神性を公言した (ルカ23章39-43節)。

彼女はこう言っている。「この二人は、償いの業のために与えられた二つの模範であると、主は私にお聞かせになりました。ヴェロニカは女性の模範です。彼女は主の大義に声高に奉仕するのではなく、キリストの聖なる顔を拭い、祈りと賛美と礼拝によって、罪人たちの冒瀆を償うよう任じられています。よき泥棒は聖職者たちの模範です。彼は、償いの業において、声高に、公然と、キリストを擁護しなければなりません。愛すべき救い主は、私に次のことをお示しになりました。主はこの二人にすばらしい報酬を与え、ヴェロニカには神聖な肖像を残し、よき泥棒には天国を与えたのです」 (p. 108-109)。

### 聖顔の賛歌（第4節）

かつて、わが生前、ヴェロニカは、／勇気を奮い起こし、／わが顔を拭い、／わが苦しみを和らげようとしてくれた。／私はヴェロニカを探している、／昼も夜も私をあがめ、／血に染まるわが顔に／愛のヴェールを押し当ててくれる人を（p. 211）。

### 十字架の道行き 第6留 敬虔な女がイエスの顔を拭う

この勇敢な女性は、辱めを受けたイエスの顔をあがめる者にとって完全なる模範である。群衆の侮蔑と、処刑人たちの粗暴なふるまいにもかかわらず、彼女がどれほど果敢に、大胆な、揺るぎない心で進み出ているかをごらん下さい。主のそばに到着すると、この暗く、変わり果てた顔、その中にも威厳と聖なる美しさが垣間見える顔を前にして、彼女はあわれみと尊敬と愛に心動かされる。彼女は頭を覆っていたエジプトの上質な亜麻布の、やわらかな白いヴェールを外し、キリストの顔に当てて、やさしく広げ、顔を拭い、苦しみを和らげる。彼女がキリストに示すのは敬意以上のものであり、現実の奉仕であり、キリストの苦しみを和らげ、その顔をさわやかにし、生気を取り戻させる。私たちは、イエスが彼女に与えた褒美を知っている。イエスは立ち去るときに、その顔の貴重な刻印を彼女に残したのである。それは、ヴァティカンが所有し、全世界が崇敬する刻印で、私たちがここに真正な複製をもっており、永久に聖なる信仰の対象となるだろう。

おお、イエスよ！ 私はこの英雄的な女性の幸福をうらやみます。どうか私にも、同じ償いの賛辞をあなたに送らせてください。私には、あなたがヴェロニカのためになされたことでは足りません。罪によって損なわれ、暗く曇ったわが魂に、どうかあなたの神聖な輪郭を刻んでください。わが魂に最初の純粹無垢と、恩寵の輝き全体を取り戻させてください（p. 225-226）。

\*\*\*

トゥールでは、聖ビエールのマリーとデュポン氏の伝記、信心会と大信心会のマニュアルを精力的に執筆し、信心会と司祭団を指導したビエール・ジャンヴィエ神父の存在があり、聖顔の信心が言語化され、体系的に伝えられることとなった。ま

た、聖顔の礼拝堂には、聖顔の司祭団が常駐し、聖務や信心業を執り行い、訪れる信徒や巡礼者たちを受け入れ、導いた。大信心会の巻末に付された聖品カタログからは、信心書や祈祷書、聖顔の複製や写真、聖油、メダイユ、ロザリオなど、聖顔の信心に特化した安価な聖具が販売されていたことが確認でき、こうした聖具も、信心会員の実践を助ける道具となったのだろう。ジャンヴィエ神父によれば、信心会を設立するや、数千人の人々が登録に殺到し、日々、登録者が増えていったという。信心会から大信心会に一気に発展する勢いをもったトゥールの大信心会は、ヨーロッパと北米に多くの会員を擁することとなる<sup>52</sup>。

	ナントのヴェロニカ兄弟会	トゥールの聖顔の大信心会
発端	ブルターニュ公ジャン5世 のローマ訪問	・1843～1848年 聖ビエールのマリイに啓示された聖顔のメッセージ ・1851年 ヴェロニカの複製の到来 ・1851～1876年 レオン・デュボン氏の客間での礼拝、奇跡、巡礼地に
創設年 認可年	1413年 1792年に廃止 1886年に再創設	1876年 聖顔の信心会 (トゥール大司教コレにより正式に認可) 1885年 聖顔の大信心会に昇格
創設者	ブルターニュ公ジャン5世	大信心会の筆頭請願者： ビエール・ジャンヴィエ神父
図像	ローマのヴェロニカ	ローマのヴェロニカ →トゥールの聖顔と呼ばれるように
場所	1413-1792年 ナントのド ミニコ会修道院 1886年～ ナントの大聖堂	トゥールのデュボン氏宅 →死後、聖顔の礼拝堂に 現在はドミニコ会が管理 <sup>53</sup>
活動内容	貧者と病者のための施し、 聖体行列ほか	神の名と主日の冒瀆の償いのための祈り
手引書	ドミニコ会修道士アントナ ン・トマ『聖ヴェロニカの 信心』(1694)	聖顔の司祭ビエール・ジャンヴィエ『聖顔の信心 の手引き』(1880)、『聖顔の大信心会の手引き』 (1886)

<sup>52</sup> *Manuel de l'Archiconfrérie de la Sainte-Face*, p. 36. 大信心会への昇格を願う嘆願書においてすでに、フランス各地(パリ、リヨン、トゥールーズ、レンヌ、アルビ、ナントほか)、ベルギー、イタリア、スペイン、スイス、オーストリア、イギリス、アイルランド、アメリカ、カナダほかの枢機卿、大司教、司教、修道会総長、管区長らの名が連ねられている(p. 39-41)。

<sup>53</sup> Couvent des Dominicains <http://www.optours.fr/>

## ローマのヴェロニカ～トゥールの聖顔

1011年	ローマにイエスの肖像がもたらされる。 教皇、「スタリウム」のための祭壇を聖別。
1143年	教皇、「ヴェロニカと呼ばれているキリストのスタリウム」に撒香。
1191年	フランス王フィリップ2世尊厳王のローマ訪問。 教皇が「イエス・キリストが顔を印した布とされるヴェロニカ」を見せる。
1207年	ヴェロニカの祈祷行列。
1321年頃	ダンテ『神曲』『天国篇』:「われらのヴェロニカを見ようとやってきて、〈わが主イエス・キリスト、まことの神よ、おん姿はかくあられたか!〉と心に思う人、私はまさにその人のようであった。」
1413年頃	ブルターニュ公ジャン5世、ローマ訪問、ヴェロニカの複製をもち帰り、帰国後、ナントのドミニコ会修道院に安置。1413年、ヴェロニカ兄弟会設立。
1527年	神聖ローマ皇帝カール5世によるローマ劫掠。ヴェロニカ紛失。
1849年	ローマでヴェロニカの布の公開。キリストの顔が浮かび上がり、報告書作成。
1851年	ローマのヴェロニカの複製がトゥールにもたらされる。 一部がレオン・デュボンの客間に飾られ、病氣治癒や回心の奇跡がはじまる。 「トゥールの聖顔」と呼ばれるようになり、聖地に。

## おわりに

ナントのヴェロニカ兄弟会は、ローマのヴェロニカを崇敬の対象とし、慈善活動を行う名士たちの団体であった。ナントで二番目に古い兄弟会として聖体の祝日の行列に参加する様子、貧者と病者に施しを寄せる様子などが記録されていた。トゥールの信心会では、革命後のフランスで日常化していたキリストの名と主日の冒瀆という社会全体の罪を、信心会員の祈りと信心業によって償うことを目的とした祈祷共同体であった。ともに、ローマからもたらされたヴェロニカを崇敬の対象とし、受難のキリストの聖顔を見つめ、思いを向けながら、一方は、飢えや病に苦しむ人々への慈善活動によって、一方は、同時代の社会的罪を償う祈りによって、その時代に固有の問題と向き合っていた。ナントの兄弟会とトゥールの信心会では、それぞれ手引書が出版され、聖顔の神秘と実践法が明確な言葉で表現されたことで、信者が黙想を深め、信心業を具体的に行うよりどころとなった。フランスの守護聖女となるリジューのテレーズ（Thérèse de Lisieux, 1873-1897）もまた、1885年にトゥールの信心会に入会し、トゥールの聖顔を見つめ、聖顔の神秘に浸透してテキストを残し、リジューのカルメル会修道院が新たな発信地となっていく。

図1 「フランス大司教座・司教座地図」*France ecclésiastique*, s. n., 18<sup>e</sup> s. Bibliothèque nationale de France.

図2 「ヴァティカンのサン・ピエトロ大聖堂に保存され、崇敬されているわれらの主イエス・キリストの聖顔」Antonin Thomas, *La Dévotion à la Sainte-Véronique*, 2<sup>e</sup> éd., Tours, Oratoire de la Sainte-Face, 1889. Bibliothèque nationale de France.

本研究は科学研究費の助成を受けたものです（課題番号21K00438、研究課題名「フランスにおける聖顔の信心の生成と展開」）。

